

九州地域の縄文時代貝輪について —東海地域からの視点—

● 川添和暁

九州地域の縄文時代・弥生時代では、貝輪風習が盛行する。本稿では、縄文時代の貝輪資料に焦点を当て、貝輪群の構造性を把握し、九州地域における縄文時代社会の共通性と地域性を追究する。地域・時期により主体となる貝種が異なることに加えて、ベンケイガイ製とフネガイ科製については独特な加工・装飾を施す事例が出現することを確認した。貝輪は女性との関係性が強い資料であることから、上記を指標とする貝輪群の範囲は、女性側の事情を色濃く示す当時の社会小地域を反映したものと考えられる。また、後期前葉を主体とする九州地域から晩期を主体とする吉備地域・東海地域で出現する多数着装事例の出現は、現象の共通性の一方で、着装者の当時の社会的位置について各地域での位置づけが必要であるとした。

1. はじめに

考古資料の分析には、さまざまな視点があるにも関わらず、一見、単純と見過ごされてしまうことから、詳細な分析が等閑視されてしまう場合が多いと、筆者は感じている。筆者が継続して扱っている貝輪のこの部類に入るものである。九州地域の貝輪資料は、別途扱う必要があると考えており、後期初頭（中期末）から後期後葉の資料について、継続して調査している。先に福岡市桑原飛節貝塚の事例を中心に分析結果を提示した（川添 2013、以下これを前稿とする）。本稿はこの前稿を受けて九州地域の縄文時代貝輪の構造群について論じていく。但し、南海性貝種の棲息域となる奄美・トカラ列島以南の資料については、筆者の理解が極めて限定的であることから、今回は見合わせた。

なお、貝種についてであるが、研磨工程が進んだ資料では貝種の特定の難しい資料も実際に多いことから、科や属、類などと包括した名称で示すこととする。フネガイ科には、サルボウガイ・サトウガイ・アカガイが含まれている。タマキガイ科としてはベンケイガイ・タマキガイ・トドロキガイが報告されているが、筆者はこれまでベンケイガイを包括する名称としても使用しており、本稿でもタマキガイ科の三種を包括して、ベンケイガイと呼称する。

2. 九州地域の貝輪の研究史

貝輪研究史については、以前まとめたことがあるので、そちらを参考願うこととしたい（川添 2011）。九州地域の貝輪研究史について、簡単に概略のみを述べておく。当地域においては、山鹿貝塚の調査・報告・分析が一つの画期をなす（永井ほか 1972）。木村幾多郎は生前着装使用していた貝輪と、埋葬に使用された貝輪の存在を提示した（木村編 1980）。貝輪製作について述べているものに、鹿児島県川上貝塚資料（新東 1991）や、福岡県山鹿貝塚資料（松永 1995）を扱った論考などがある。2000年代に入ると、九州縄文研究会で装身具が取上げられ、資料集成および考察が行われた（九州縄文研究会 2005）。

九州地域の貝輪については、2000年以降、河仁秀が注目すべき論を展開している。自身が調査した釜山広域市影島区東三洞貝塚出土資料の分析を進めた結果、貝輪製作遺跡の様相に言及し、その供給先について、佐賀貝塚をはじめ、日本側への流通に言及している（河仁秀 2004 など）。

3. 資料の出土状況

3-a. 時期・地域別の状況（図1・表1～表3）
九州地域の貝輪の出土について、管見に及

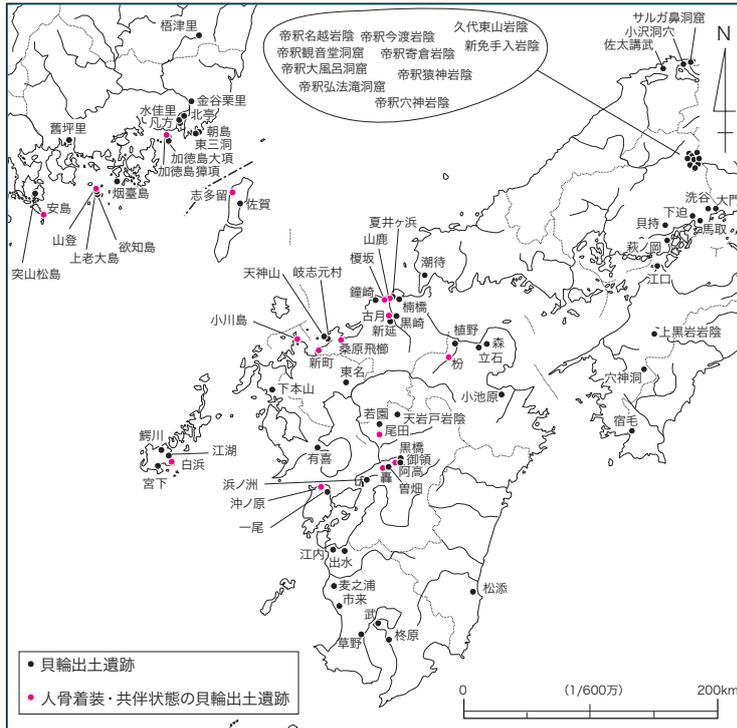
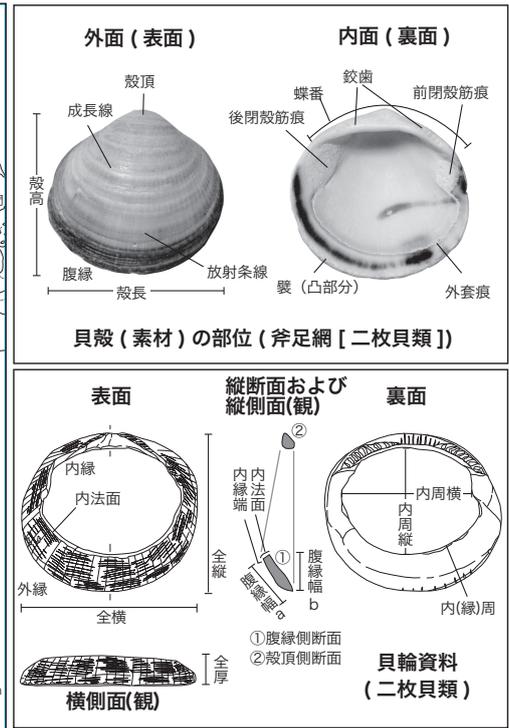


図1 九州島を中心とした縄文時代貝輪出土遺跡位置図



貝殻(素材)の部位(斧足綱[二枚貝類])

貝輪資料(二枚貝類)

表1 九州島を中心とした縄文時代貝輪出土遺跡一覧(1)

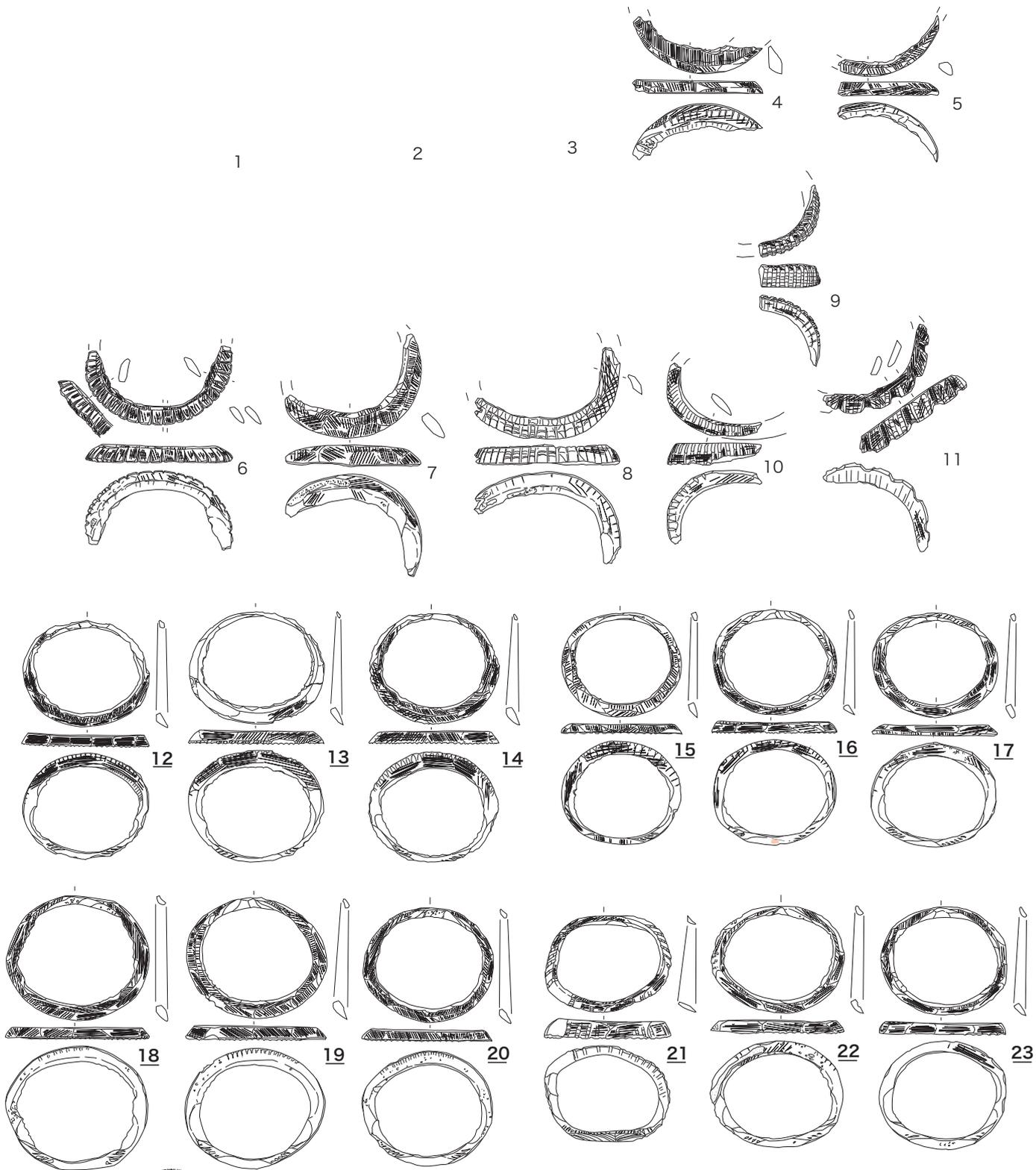
※作成に際しては、九州縄文研究会 2005『九州の縄文時代装身具』第15回九州縄文研究会沖縄大会資料集 を参考に、加筆・修正した。

遺跡名	所在地	大別時期	詳細時期	ベンケイガイ	フネガイ科 (マキガイ)	備考	文献												
橋本貝塚	福岡県北九州市八幡西区	前期	轟B・西唐津式期	2												3層(縄文前期貝層)から出土、2層は縄文後期~弥生前期の包含層	山口信義 1988『橋本貝塚』北九州市埋蔵文化財調査報告書 69		
黒崎貝塚	福岡県北九州市八幡西区	後期中葉	鐘ヶ崎式・北久根山式期	2												竹中岩夫 1970『黒崎貝塚』北九州郷土史研究会	橋 昌信 1981『黒崎貝塚』黒崎遺跡調査会		
寿命貝塚	福岡県北九州市八幡西区	後期中葉	鐘ヶ崎式期	3													小田富士雄ほか 1994『九州の貝塚—貝塚が語る縄文人の生活—』北九州立考古博物館 第12回特別展図録		
榎坂貝塚	福岡県遠賀郡岡垣町	後期中葉	鐘ヶ崎式期	29	8												小田富士雄ほか 1994『九州の貝塚—貝塚が語る縄文人の生活—』北九州立考古博物館 第12回特別展図録		
夏井ヶ浜貝塚	福岡県遠賀郡芦屋町	晩期末		13	2												中村修身編 1994『山鹿貝塚・夏井ヶ浜貝塚収集資料—垂水康氏収集資料目録—』芦屋町埋蔵文化財調査報告書第6集		
山鹿貝塚	福岡県遠賀郡芦屋町	早期~後期中葉		92	2											1号着衣分は含めていない	永井昌文・前川威洋・橋本達也 1972『山鹿貝塚』山鹿貝塚調査団		
				11	1													中村修身編 1994『山鹿貝塚・夏井ヶ浜貝塚収集資料—垂水康氏収集資料目録—』芦屋町埋蔵文化財調査報告書第6集	
				17	6													ベンケイガイはタマキガイが16フネガイ科はアカガイという	松永幸男 1995『福岡県遠賀郡芦屋町山鹿貝塚採集貝類製輪の紹介』『研究紀要』2. 31~52頁 北九州立考古博物館
				14	12												1	フネガイ科はサトウガイ(1号着衣資料)	福永将大・角橋京子 2019『福岡県遠賀郡山鹿貝塚採集の貝輪・貝輪資料』『九州考古学』94. 121~131頁 九州考古学会
新延貝塚	福岡県遠賀郡鞍手町	前期~中期	轟B式・曾畑式~阿高式期	7	3										別に八幡工業高校郷土研究部の調査で、ベンケイガイ2・ほか3の貝輪が出土	木村幾太郎 1980『新延貝塚』鞍手町埋蔵文化財調査会			
古月貝塚	福岡県遠賀郡鞍手町	後期		1													小池史哲 1995『新延貝塚』福岡県文化財調査報告書 122集		
沖ノ島4号洞穴	福岡県宗像市大島	前期~中期														1	岡崎 敬・小田富士雄ほか 1971『沖ノ島 宗像大社沖津宮祭遺跡 昭和45年度概報告』宗像大社復興期成会 前川威洋・橋本達也 1979『縄文・弥生時代遺跡の調査』『宗像 沖ノ島』宗像大社復興期成会		
鐘ヶ崎貝塚	福岡県宗像市	後期中葉		1	以上												木下尚子 1997『特徴ある縄文文化』『宗像市史 通史編 第一巻 自然考古』543~548頁 宗像市		
豊原飛船貝塚	福岡県福岡市西区	後期初頭	坂ノ下式期	70	21												井澤洋一編 1996『豊原遺跡群2—飛船貝塚第1次調査—』福岡県埋蔵文化財調査報告書第480集		
天神山貝塚	福岡県糸島市	後期初頭		8	1												前川威洋 1974『天神山貝塚』志摩町文化財調査報告書 1		
岐志元村貝塚	福岡県糸島市	後期中葉	北久根山式期	3													報告には、オオツタノハ・タマキガイ・貝種不明1とある	宮本一夫編 2000『福岡県岐志元村遺跡 縄文貝塚・江戸墓地の発掘調査』考古資料集 15 国立歴史民俗博物館(九州大学大学院人文科学研究所考古学研究室)	
新町遺跡	福岡県糸島市	後期		5	α	23	α									1	αは土壌層人骨着衣貝輪資料	河村裕一郎 1992『新町遺跡V』志摩町文化財調査報告書 16	
東名遺跡	佐賀県佐賀市	早期末葉主体			77			8		2						3	フネガイ科はクイチガイサルボウ・アカガイ・サトウガイ	西田 巖編 2009『東名遺跡群II』第4分冊 佐賀県埋蔵文化財調査報告書第40集	
小川島貝塚	佐賀県唐津市	晩期末~弥生前期		6													1	ゴホウラ製貝輪は弥生前期の可能性大	田島隆太ほか 1977『小川島貝塚』唐津原始文化研究会 富俣憲次・木村幾太郎 1982『小川島』『未遑国』六興出版
野川貝塚	長崎県五島市岐宿郷	後期															1	九州縄文研究会 2005『九州の縄文時代装身具』第15回九州縄文研究会沖縄大会資料集(長崎県:古門雅高)	

表2 九州島を中心とした縄文時代貝輪出土遺跡一覧(2)

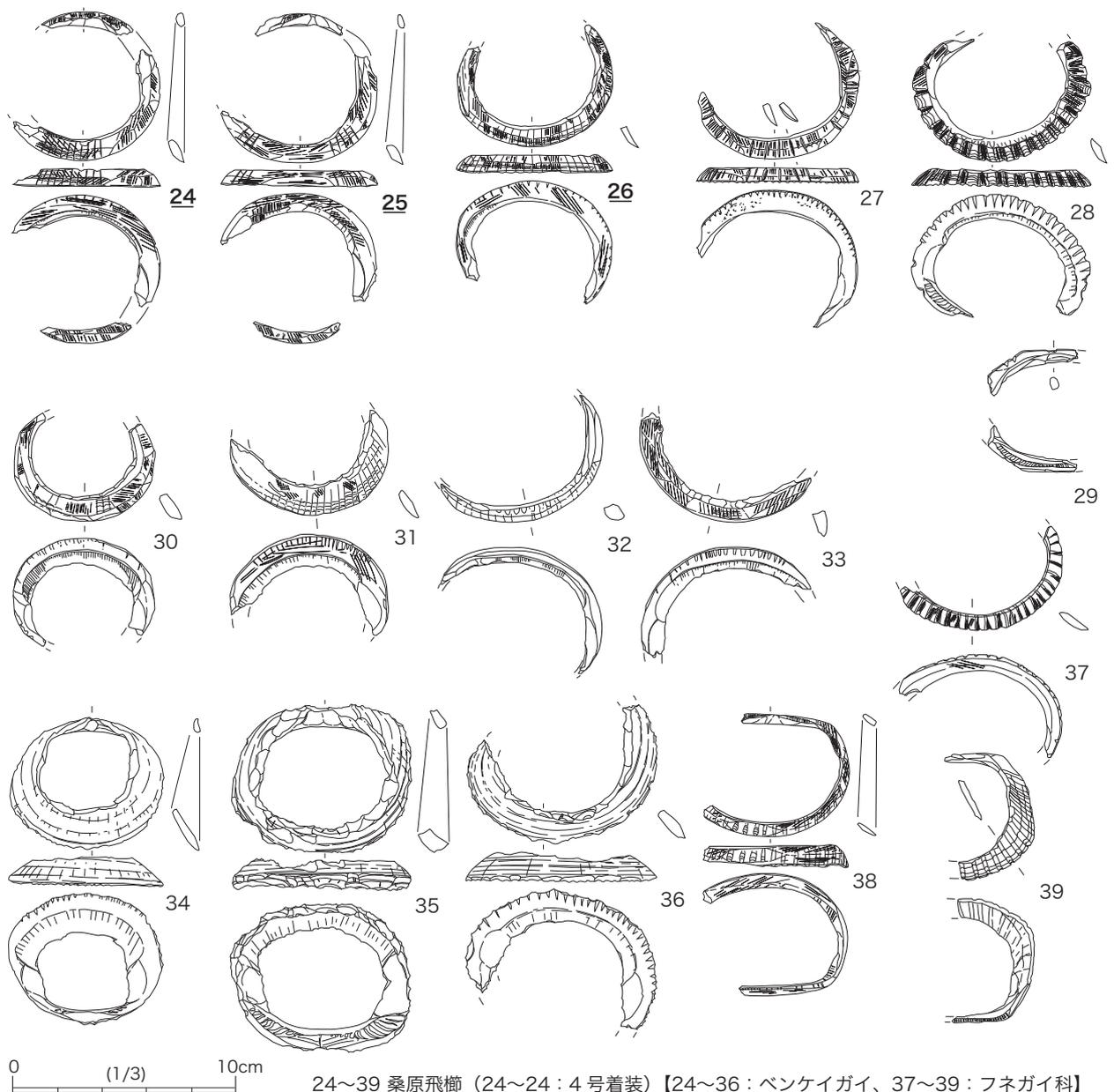
※作成に際しては、九州縄文研究会 2005『九州の縄文時代装身具』第15回九州縄文研究会沖縄大会資料集 を参考に、加筆・修正した。

遺跡名	所在地	大別時期	詳細時期	ベンケイガイ	フネガイ科	(Kureha) (Nanashi)	ツノガイ	イタボガキ科	アカシ	マツバガイ	ユキノカサ	アツヒ類	オオタンハ	ゴボウ	その他(未命名)	備考	文献		
白浜貝塚	長崎県五島市向町	晩期後半～弥生前期		3	1										1		安楽 勉編 1980『白浜貝塚』福江市文化財調査報告書第2集		
宮下貝塚	長崎県五島市宮下町	後期		56	31	3?	3	1								別にベンケイガイの素材貝2	廣川光夫ほか 1968『宮下遺跡調査報告(図録編)』長崎県文化財調査報告書第7集 廣川光夫ほか 1971『宮下遺跡調査報告(解説編)』長崎県文化財調査報告書第9集		
江湖貝塚	長崎県五島市大津町	前期			13	11										フネガイ科はサルボウとある	川道 寛 1998『宮下貝塚』宮下町文化財調査報告書第1集 坂田邦洋 1973『昔式土器に関する研究 江湖貝塚』縄文文化研究会		
佐賀貝塚	長崎県対馬市	後期		131	5	1				5	2	4			1	その他はウミウサギ	正林 護編 1989『佐賀貝塚』峰町文化財調査報告書第9集		
志多留貝塚	長崎県対馬市	後期		1	2	1										フネガイ科はサルボウ?	水野清一・樋口隆康・岡崎 敬 1953『対馬』東方考古学叢刊 乙種第六冊 駒井和豊・増田精一・中川成夫・會野壽彦 1954『考古学から見た対馬』『対馬の自然と文化』総合研究報告第2巻 249～279頁 古今書院 坂田邦洋ほか 1976『対馬の考古学』縄文文化研究会		
下本山岩陰	長崎県佐世保市	前期		1				1									麻生 優 1972『下本山岩陰』佐世保市教育委員会		
有喜貝塚	長崎県諫早市	中期～後期			1											フネガイ科はサルボウとある	秀島貞康 1984『有喜貝塚』諫早市文化財調査報告書第5集		
粉洞穴	大分県中津市本部馬深町	後期初頭		3	2	以上											廣川光夫・内藤芳篤 1977『大分県粉洞穴発掘調査報告—第1・2次調査—』考古学論叢 4. 81～110頁 別府大学考古学会		
植野貝塚	大分県中津市	後期初頭～中津式～小池原式期		4												4	廣川 光夫 1957『大分県(豊前)中津市植野貝塚調査報告』中津市教育委員会		
立石貝塚	大分県宇佐市	後期前葉		2	1												廣川光夫ほか 1971『立石貝塚』大分県文化財調査報告書 31		
森貝塚	大分県後高田市	後期前葉			3												樋口清之 1931『大分縣西國東郡河内村森貝塚の研究』『史前学雑誌』3-1. 18～50頁 史前學會		
成仏岩陰遺跡	大分県国東市	早期			2												坂田邦洋 1972『国東町文化財調査報告書 縄文時代に関する研究 成仏岩陰遺跡の調査』国東町教育委員会		
川原田洞穴	大分県杵築市山香町	早期～後期中葉													1	奔走綱。腹縁側を中心に連続した刻目目地される。	岩尾松英・酒匂義明 1964『早水郡山香町大広瀬川原田洞穴の調査』『大分県地方史』34. 13～29頁 大分県地方史研究会		
小池原貝塚	大分県大分市	後期前葉	小池原上層式・下層式	2	1												廣川光夫・小田富士雄・橋 昌彦 1967『野間古墳群・横尾貝塚・小池原貝塚緊急発掘調査』大分県文化財調査報告書 13		
柳貝塚	熊本県上天草市大矢野町	早期末～前期			4												村上浩明ほか 2001『資料報告』『考古学研究会報告』36. 1～18頁 熊本大学文学部考古学研究室		
轟貝塚	熊本県宇土市	早期末～後期中葉			3										2?	フネガイ科はアカガイ	濱田耕作・榊原政雄・清野謙次 1920『肥後國宇土郡轟村古墳貝塚貝人骨報告』京都帝國大学文学部考古学研究报告 5		
					4												村上浩明ほか 2001『資料報告』『考古学研究会報告』36. 1～18頁 熊本大学文学部考古学研究室		
					1	16		1									藤本貴仁 2008『轟貝塚 一慶應義塾大学資料再整理報告—』宇土市埋蔵文化財調査報告書第30集		
西岡台貝塚	熊本県宇土市																平山修一・高木恭二 1977『轟貝塚(西岡台地区)の調査』『宇土城跡(西岡台)』宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集(本文編)		
曾畑貝塚	熊本県宇土市	前期主体			1												藤本貴仁 2011『曾畑貝塚 一慶應義塾大学資料再整理報告—』宇土市埋蔵文化財調査報告書第32集		
尾田貝塚	熊本県玉名市天水町	前期～中期			30			2									フネガイ科はサトウガイ。中にはベンケイガイも含まれているか?	田辺哲夫・坂田邦洋 1981『尾田貝塚 熊本県玉名市天水町尾田における縄文・中期貝塚の研究』『史学論叢』12. 25～169頁 別府大学史学研究会	
若園貝塚	熊本県玉名郡和水町	中期～後期			1												福永光隆ほか 1981『若園』菊水町文化財調査報告書 3集		
阿高貝塚	熊本県熊本市区南区	中期～後期前葉		2	3												矢野 寛・山崎春雄 1918『阿高貝塚』『熊本縣史蹟調査報告』第2回 89～95頁 熊本縣教育會史蹟調査部		
					1												フネガイ科はアカガイ	西田道世 1978『阿高貝塚』城南町教育委員会	
					7	10	6										帆足俊文編 2005『阿高貝塚』熊本県文化財調査報告書第223集		
黒橋貝塚	熊本県熊本市区南区	中期～後期		3	3												高木正文・島崎孝宏編 1998『黒橋貝塚』熊本県文化財調査報告書第166集		
御嶽貝塚	熊本県熊本市区南区	後期末～晩期初頭														5	貝層未確認 腹縁側削り入れ状の加工のものあり	九州縄文研究会 2005『九州の縄文時代装身具』第15回九州縄文研究会沖縄大会資料集(熊本県:池田朋生)	
沖ノ原貝塚	熊本県上天草市五和町	前期～後期			4												田辺哲夫・隈昭志 1984『沖ノ原遺跡』五和町教育委員会		
一尾貝塚	熊本県上天草市五和町	後期		18	13		5						1		巻貝? ?	フネガイ科はサルボウ・アカガイ	山崎純男 2000『一尾貝塚』熊本県五和町史資料編(その11)		
大野貝塚	熊本県八代郡水川町	中期～後期															九州縄文研究会 2005『九州の縄文時代装身具』第15回九州縄文研究会沖縄大会資料集(熊本県:池田朋生)		
浜ノ洲貝塚	熊本県宇城市	後期中葉	鐘ヶ崎式・市来式・北久根山式期	2	45												松本健郎・高木恭二ほか 1987『浜ノ洲貝塚・丸子島古墳』熊本日日新聞社		
					1												濱田邦久 1998『浜ノ洲貝塚』三角町文化財調査報告書第8集		
					3	27	2										フネガイ科はクマサルボウ 未加工のイタボガキ左6・右10も存在	波形早季子 2014『熊本県浜ノ洲貝塚出土の貝輪について』『福岡県立大学学術資料センター 研究報告』30. 27～49頁 福岡県立大学研究開発推進機構学術資料センター	
天岩戸岩陰遺跡	熊本県山鹿市菊鹿町	後期～晩期		2													松本健郎ほか 1978『菊鹿川流域文化財調査報告書』熊本県文化財調査報告書第31集		
松添遺跡(松添貝塚)	宮崎県宮崎市	後期後半～晩期前半		2	2												鈴木重治・野間重孝 1974『松添貝塚』宮崎市文化財調査報告書第2集		
江内貝塚	鹿児島県出水市高尾野町	中期			1												中山 豪ほか 1999『松添貝塚 II』宮崎市文化財調査報告書第37集		
					4												すべてタマキガイ	長野真一編 1992『江内貝塚』高尾野町文化財調査報告書(2)	
出水貝塚	鹿児島県出水市	中期～後期		1	1	1											フネガイ科はアカガイ類 ウミギクガイはチリボタン 半環状で両端穿孔あり	島田貞彦・濱田耕作・長谷部原人 1921『鹿野田出水郡出水町尾崎貝塚調査報告』京都帝國大学文学部考古学研究报告 6	
					2	2												タマキガイ	岩崎新輔・堂込秀人 2000『出水貝塚』出水市埋蔵文化財調査報告書 11
					5	2								1				フネガイ科はサルガイ	松山初音・大保秀樹 2020『出水貝塚』県内遺跡発掘調査等事業に伴う河口貞徳コレクション発掘調査報告書(3) 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第201集
麦之浦貝塚	鹿児島県薩摩川内市	中期～後期中葉		46	64			1		5-α			1	α			報告ではベンケイガイ6・トドロキガイ14	中島哲郎・牛之浜修 1987『麦之浦貝塚』川内市土地開発業者	
市来貝塚	鹿児島県市来市	中期～後期中葉		4	4												フネガイ科はアカガイ 報告のカミガイはベンケイガイか タマキガイとマルサルボウ	清野謙次 1969『日本貝塚の研究』岩波書店	
					19	7												新妻晃一・堂込秀人 1991『川上(市来)貝塚』市来町教育委員会	
					14	4	1											新妻晃一・児玉健一郎 1993『川上(市来)貝塚 II』市来町教育委員会	
													1					本田道隆 1994『九州本土と南島の交流』『九州の貝塚—貝塚が語る縄文人の生活—』北九州市立考古博物館	
草野貝塚	鹿児島県鹿児島市	後期		30	54		8			4								タマキガイとトドロキガイ クイガイとサルボウとサトウガイ	出口 浩・中村直子ほか 1988『草野貝塚』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
武貝塚	鹿児島県鹿児島市	後期			4													フネガイ科はサルボウ	泉 拓良ほか 1998『鹿児島県鹿嶋町武貝塚発掘調査報告書』奈良大学考古学研究室調査報告書 16
柘原貝塚	鹿児島県垂水市	後期		24	28		4									1		羽生文彦・宮迫佑治 2005『柘原貝塚』垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(8)	



1~3 榎坂、4・5 黒崎、6~11 新延、12~23 山鹿 (12~14 : 2号左腕、
15~17 : 2号右腕、18~20 : 3号左腕、21~23 : 3号右腕)
【1~8・12~20・22・23 : ベンケイガイ、9~11・21 : フネガイ科】

図3 九州地域の縄文時代貝輪1 (北部九州域)【縄文時代後期】



24~39 桑原飛櫛 (24~24: 4号着装) 【24~36: ベンケイガイ、37~39: フネガイ科】

図4 九州地域の縄文時代貝輪2 (北部九州域) 【縄文時代後期】

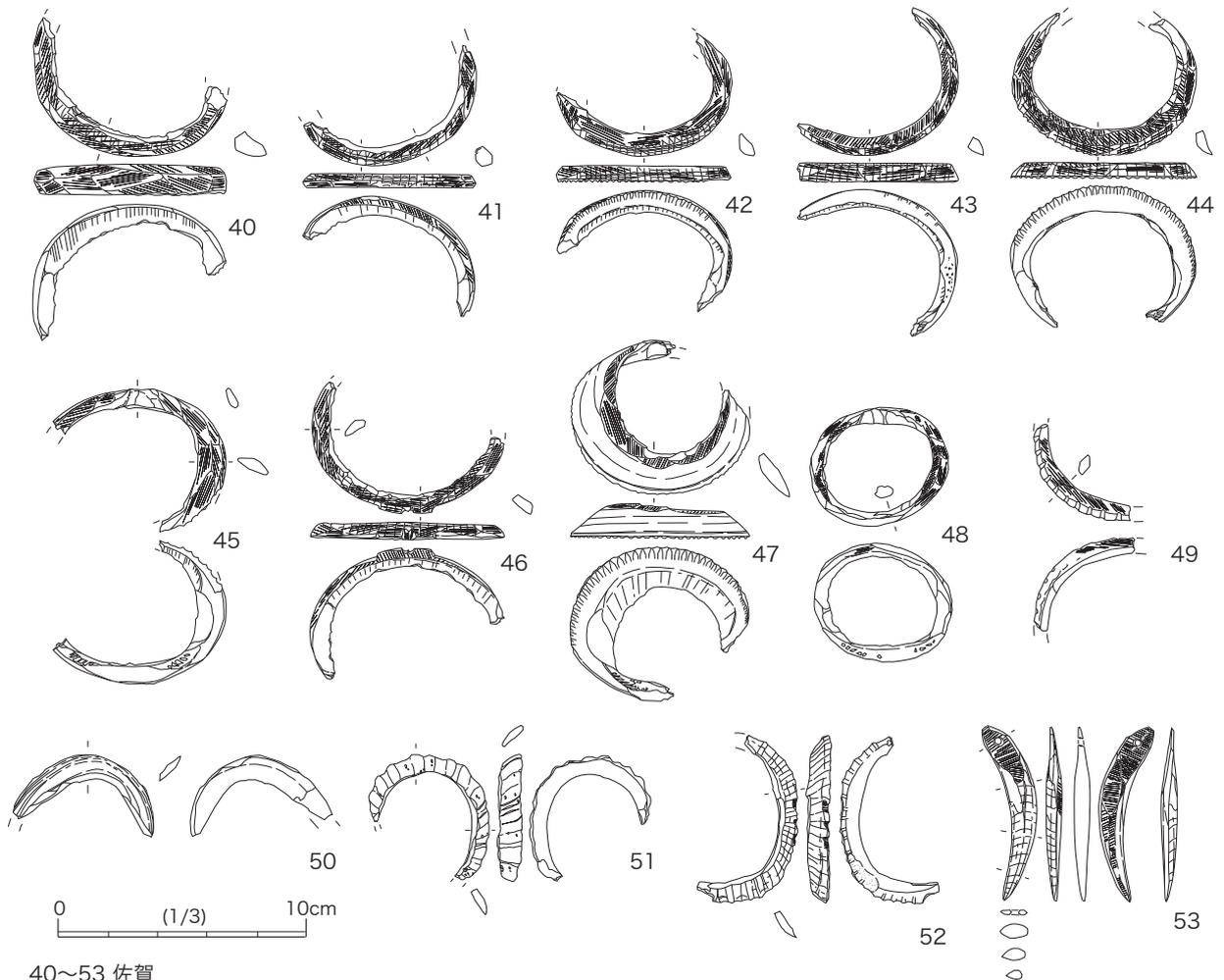
ぶ限り把握した点数を表1・表2に、遺跡の位置については図1に示した。54遺跡、総計約1,300点の資料の存在を確認した。出土遺跡の地理的状況を見ると、以下の地域に分けられる。

- A地域：玄界灘沿岸域 (西北九州域1)
- B地域：対馬列島 (西北九州域2)
- C地域：五島列島 (西北九州域3)
- D地域：国東半島・別府湾沿岸 (東九州域)
- E地域：有明湾岸・八代海沿岸・天草諸島沿岸 (中九州域)
- F地域：甌海峡および日南海岸以南 (南九州域)

時期としては、縄文時代早期末から顕在化し、晩期末までの以下の5期に分けられる。

- I期：早期末～前期初頭
- II期：前期～中期
- III期：後期初頭～後期中葉
- IV期：後期後葉～晩期
- V期：晩期末～

以上の内容をまとめたのが表3である。対象地域全体で資料が確認されるのは、III期 (後期初頭～後期中葉) で、この時期が最も貝輪資料が多く見ついている。一方、E地域 (有明湾



40~53 佐賀

【40~48：ベンケイガイ、49：フネガイ科、50：マツバガイ、51：ユキノカサ？、52：サルアワビ、53：キバノロ犬歯】

図5 九州地域の縄文時代貝輪3（対馬・五島列島）【縄文時代後期】

岸・八代海沿岸・天草諸島岸域）では、I期（早期末～前期初頭）・II期（前期～中期）の事例がまとまっており、内湾域の当地は先行して貝輪風習が盛行した地域であったといえよう。

3-b. 人骨着装・共件事例（表4）

九州地域は、日本列島内でも人骨着装および共伴の貝輪事例が数多く確認されている地域で、人骨着装状態の事例は10遺跡18例である。時期別にみるとII期（前期～中期）が5例で、いずれもC地域（中九州域）に集中する。一方、III期（後期初頭～後期中葉）が13例で、A地域（玄界灘沿岸域）における集中が著しい。榎坂貝塚・山鹿貝塚・桑原飛櫛貝塚・新町貝塚では、5点以上の多数着装事例が集中しており、特に山鹿

貝塚では人骨着装事例の7例のうち、多数着装が6例と圧倒的な集中を示す。

人骨共件事例は3例を確認した。このうち、尾田貝塚の事例は、着装状態にあった可能性もいわれているものであるが、出土状況の記録からみると遊離した状態であった。小川島貝塚および白浜貝塚の事例はいずれも晩期末以降の事例である。小川島貝塚は人骨集中域からの出土（130・131）*、白浜貝塚は小児骨に伴って出土したとされるものである。実際、当該資料である135は、内周縦3.70cm・内周横3.01cm・内縁周10.75cmを測り、法量は小さい。

人骨の性別が報告されているものを見ると、女性や小児に関係する事例が多く、日本列島で

*数字のみは、図3～11の資料番号を示す。以下同じ。

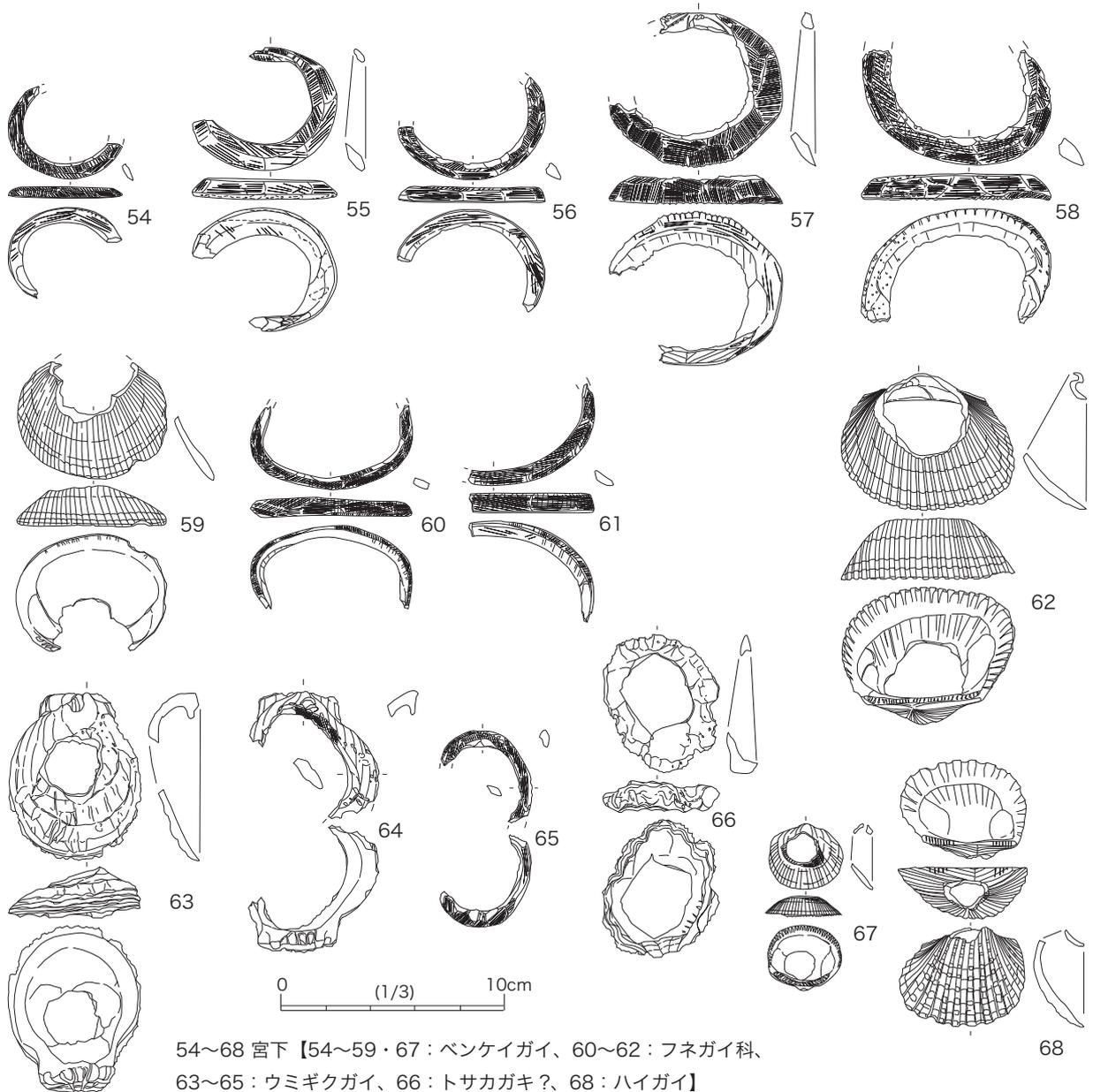


図6 九州地域の縄文時代貝輪4（対馬・五島列島）【縄文時代後期】

知られている貝輪装着事例とは相違ない。古月貝塚および志多留貝塚では男性人骨との装着が、尾崎貝塚では共伴事例が報告されている。日本列島全域でも、共伴事例として静岡県蜷塚貝塚で男性人骨脇から出土したイタボガキ右製貝輪が知られている程度と極めて少ない。

榎坂貝塚資料では、人骨装着資料（未実測）と包含層出土資料（1～3）では、研磨工程を経たことで想定される腹縁部断面形状による製作の在り方が著しく異なっていた。生前装着使用貝輪と埋葬時使用貝輪との別存在を提示した

木村幾多郎の指摘を追認することができる（木村編 1980）。

4. 貝種別検討

ここでは、貝種別に資料を概観していく。

4-a. ベンケイガイ 725点を確認した。点数としては全体の5割以上を占めており、広く出土しているように見える。しかし、E地域（有明湾岸・八代海沿岸・天草諸島岸域）では、点数自体が少ない上に、いずれの資料も複数回敲

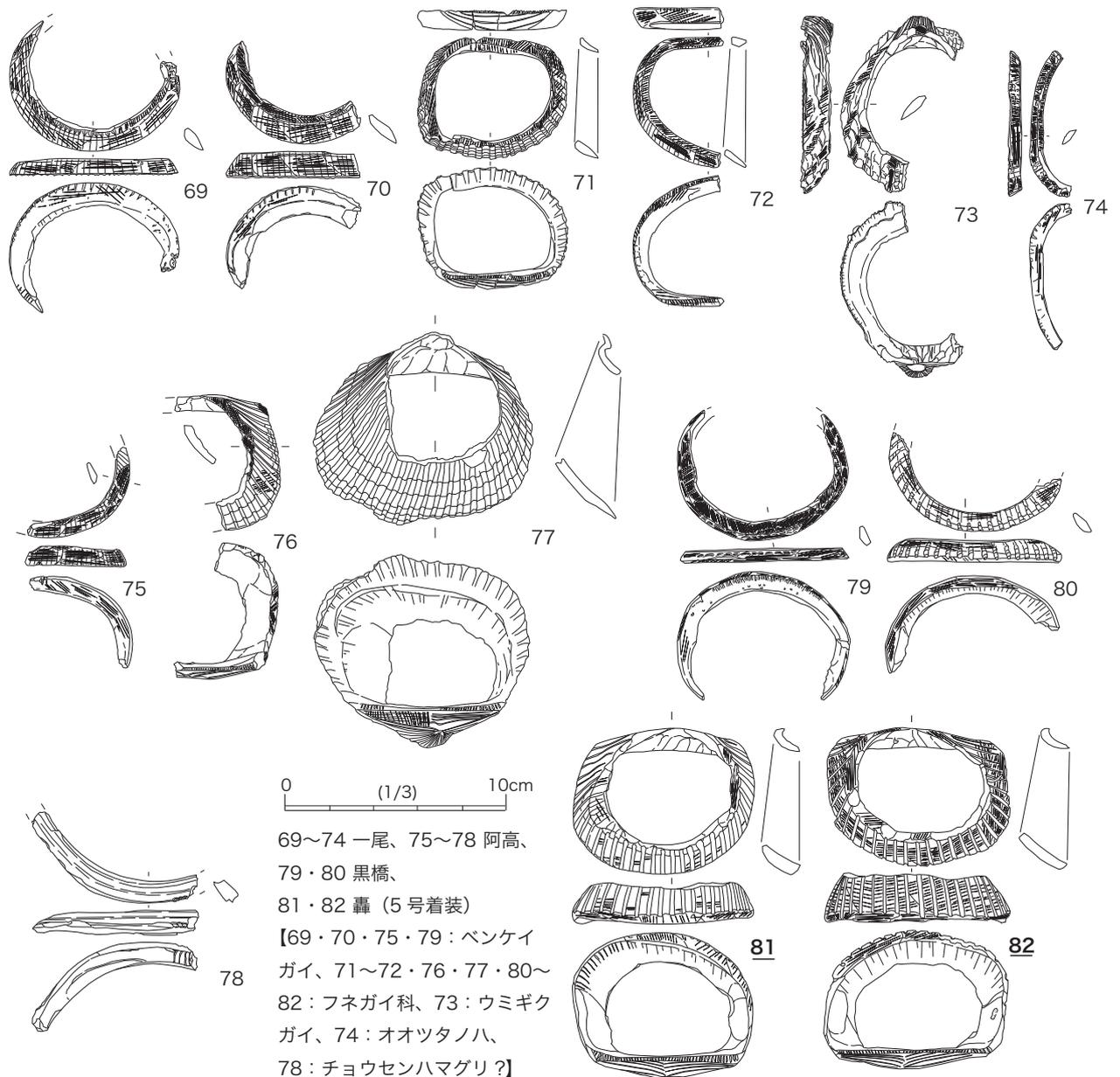


図7 九州地域の縄文時代貝輪5 (熊本・宇土半島・天草地域) 【縄文時代前期~後期】

打+研磨と、搬入資料である様相を呈する。なお、B地域（対馬列島）では敲打状態で終了している資料はほぼ皆無である（表5）。

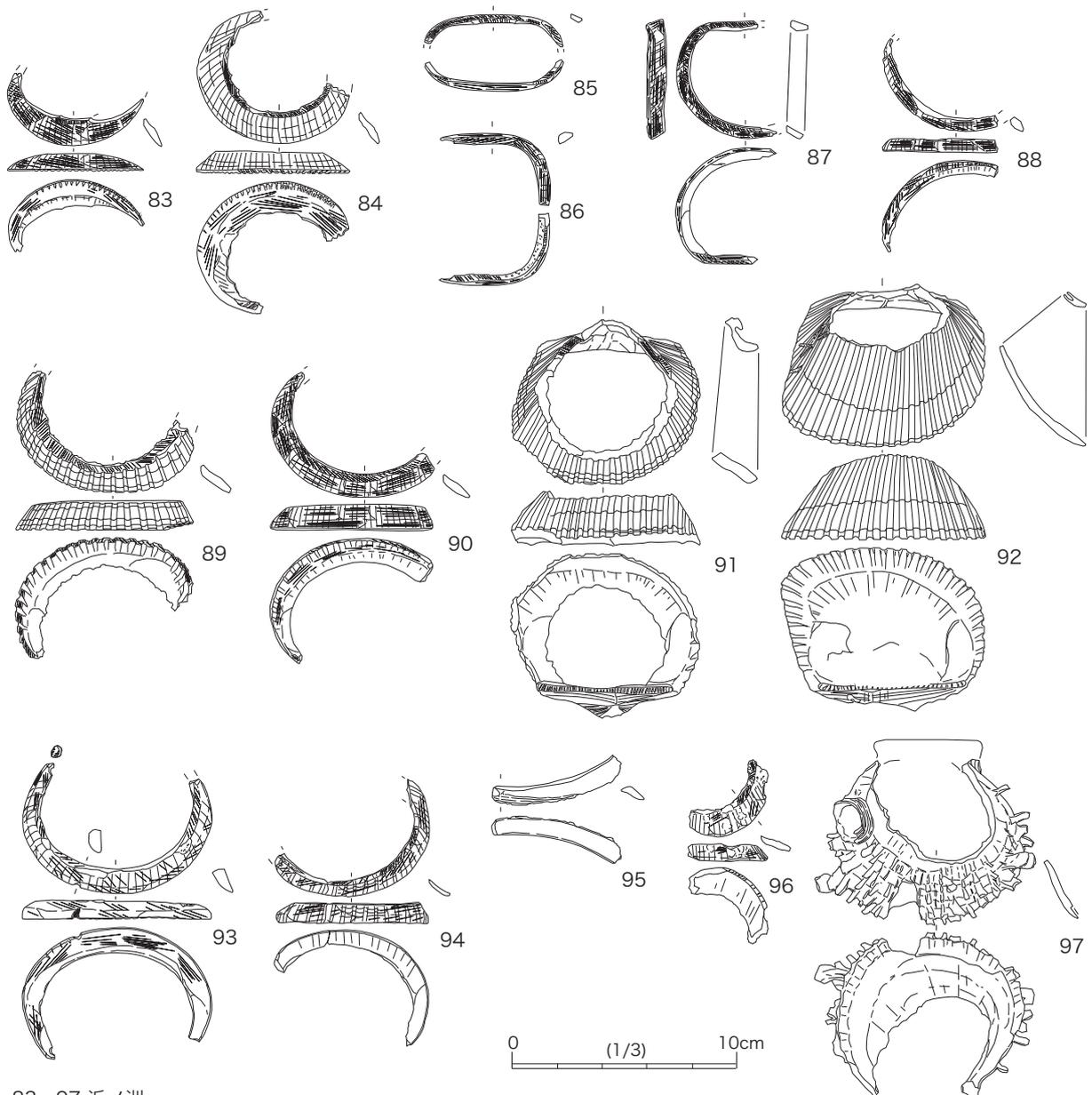
平面形状は環状を呈するものが圧倒的多数であるが、希に半環状を呈する事例もある（93）。

4-b. フネガイ科 543点を確認し、全体の約4割を占めることから、ベンケイガイ同様に貝輪貝種の主体となっている。ベンケイガイ製とは対照的に、E地域（有明湾岸・八代海沿岸・天草諸島岸域）での主体となっており、初回敲打以降、各工程の資料をみることができる（表

5）。早期末の東名遺跡事例では、ベンケイガイを含まないフネガイ科主体となっており、当地域の本来の貝輪資料の在り方を彷彿させるものである。

4-c. ウミギクガイ 24点を確認した。A・B・D地域以外で出土しており、草野貝塚では8点と最もまとまって出土している。貝殻は鮮やかな橙から赤紫色を呈するもので、色調的な理由から好まれたものと考えられる。

4-d. マツバガイ・ユキノカサ・アワビ類 マツバガイは11点、ユキノカサは2点、アワビ



83～97 浜ノ洲、

【83・84・93：ベンケイガイ、85～92・94：フネガイ科、95：アワビ類、96・97：ウミギクガイ】

図8 九州地域の縄文時代貝輪6（熊本・宇土半島・天草地域）【縄文時代後期】

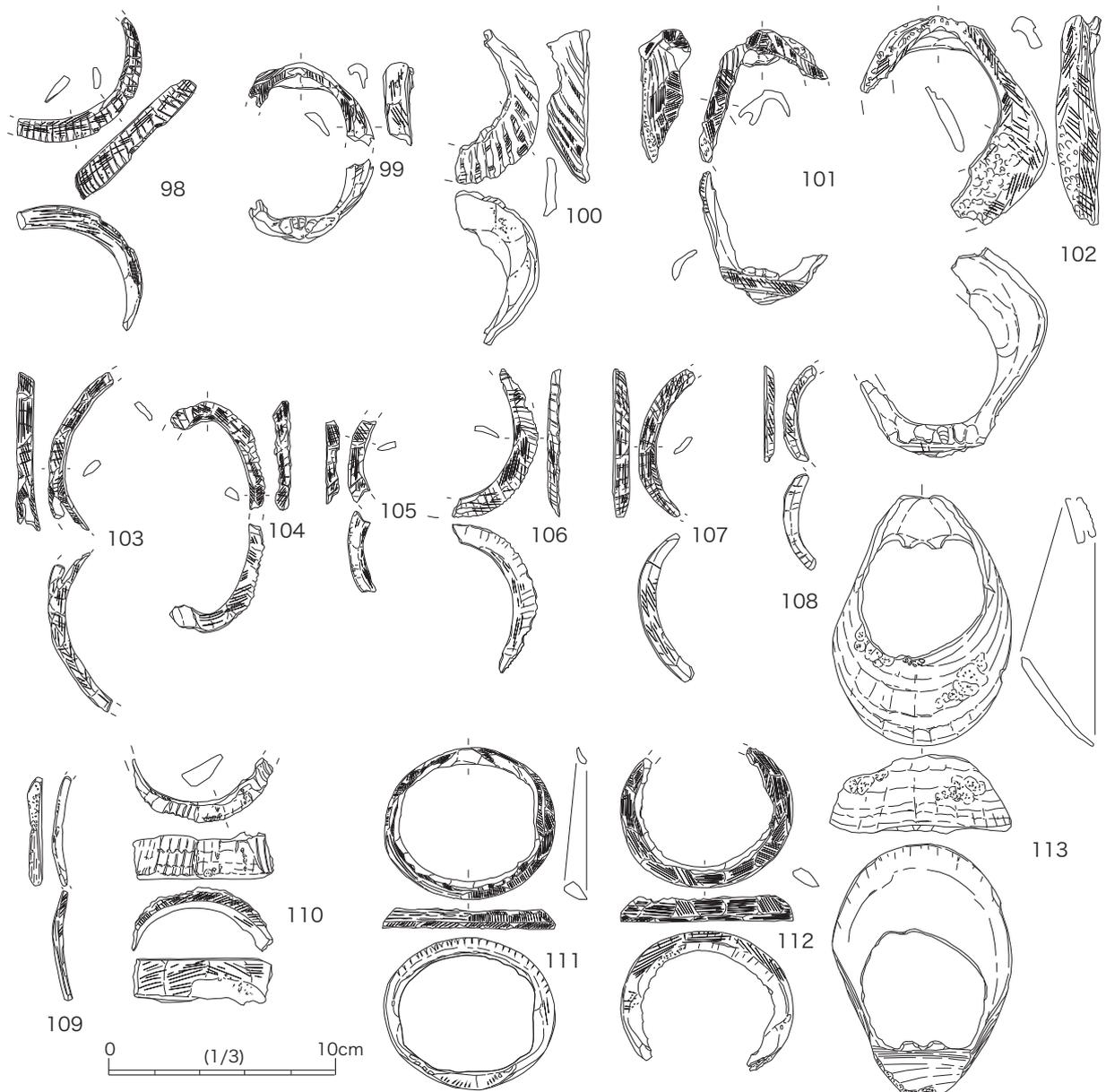
類は4点である。上述したウミギクガイ製の出土地域に加えて、B地域（対馬列島）でも確認されるものである。

4-e. 南海産貝種 オオツタノハ5点、ゴホウラ2点である。

オオツタノハ製は東名遺跡で3点出土している。東名遺跡では、フネガイ科が貝種として圧倒的多数を占めるなか存在していることに加えて、当地におけるオオツタノハ利用の最古の例

としても注目される。また縄文時代後期の事例としては一尾貝塚と市来貝塚で出土している。

一方、ゴホウラ製は小川島貝塚と出水貝塚で各1点出土している。特に小川島貝塚例（134）は素材を縦切りした円環状を呈するもので、いわゆる大友型貝輪（藤田・東中川ほか1981）として知られているもので、弥生時代前期に属する可能性が高い。



98～110 麦之浦、111～113 市来

【98・111・112：ベンケイガイ、99～102・113：ウミギクガイ、103～105：オオツタノハ、106・107：マツバガイ、108：カサガイ類、109：アワビ類、110：アカニシ】

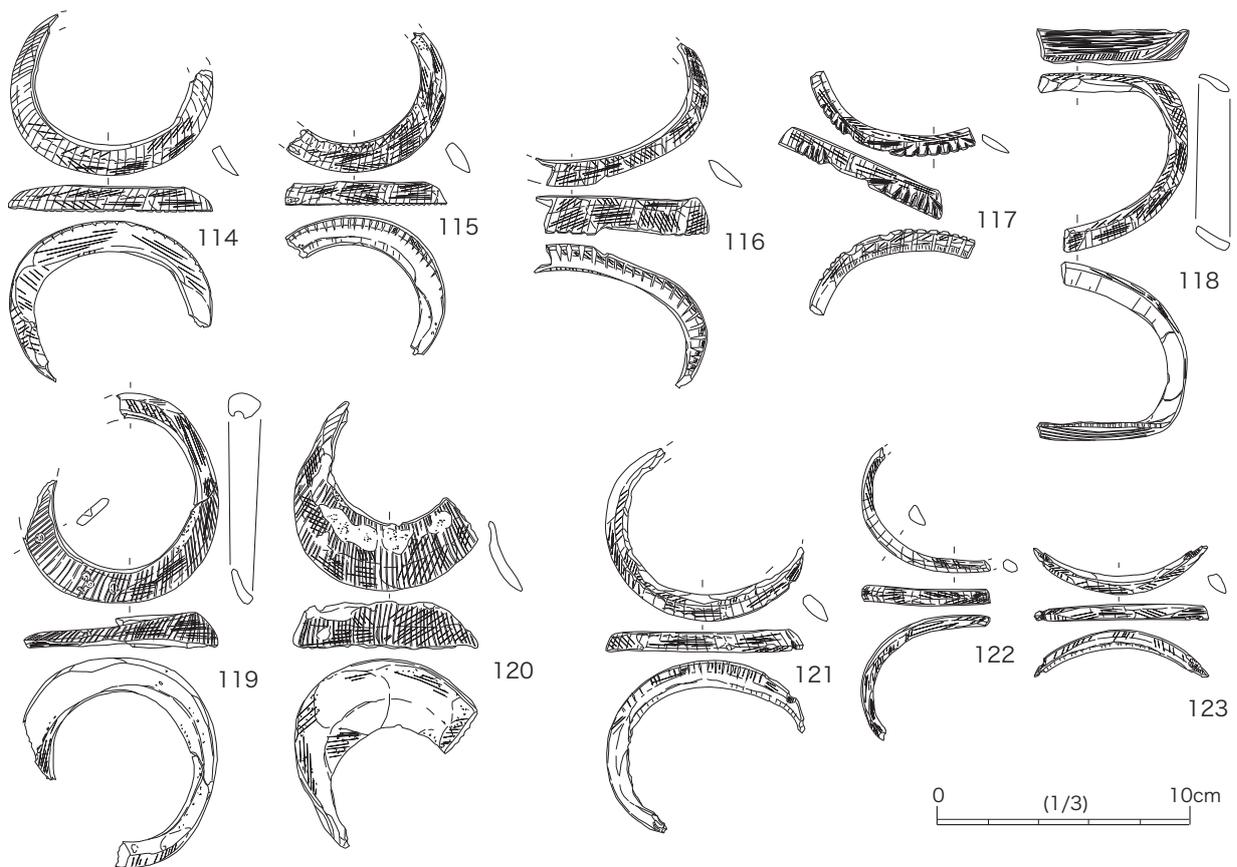
図9 九州地域の縄文時代貝輪7（甌海峡沿岸）【縄文時代後期】

5. 加工について

Ⅲ期（後期初頭～後期中葉）のベンケイガイ・フネガイ製貝輪には、特徴的な加工装飾が認められ、加えてベンケイガイ製貝輪には独特な加工志向が認められることを、前稿で述べた（川添 2013）。今回は対象範囲を広げて、再度検討

をしていくこととする。

5-a. ベンケイガイ製腹縁側の断面形状 ここでは、A地区の桑原飛櫛貝塚、B地区の佐賀貝塚、C地区の宮下貝塚、の3遺跡の資料を中心に分析を試みた。この3遺跡はいずれもベンケイガイ製主体の貝輪群となっており、構成比では、各貝輪群とも、6割以上がベンケイガイ製貝輪である。ベンケイガイ製貝輪に引き続く貝



114～120 草野、121～123 柘原
 【114・115・121～123：ベンケイガイ、116～118：フネガイ科、119・120：ウミギクガイ】

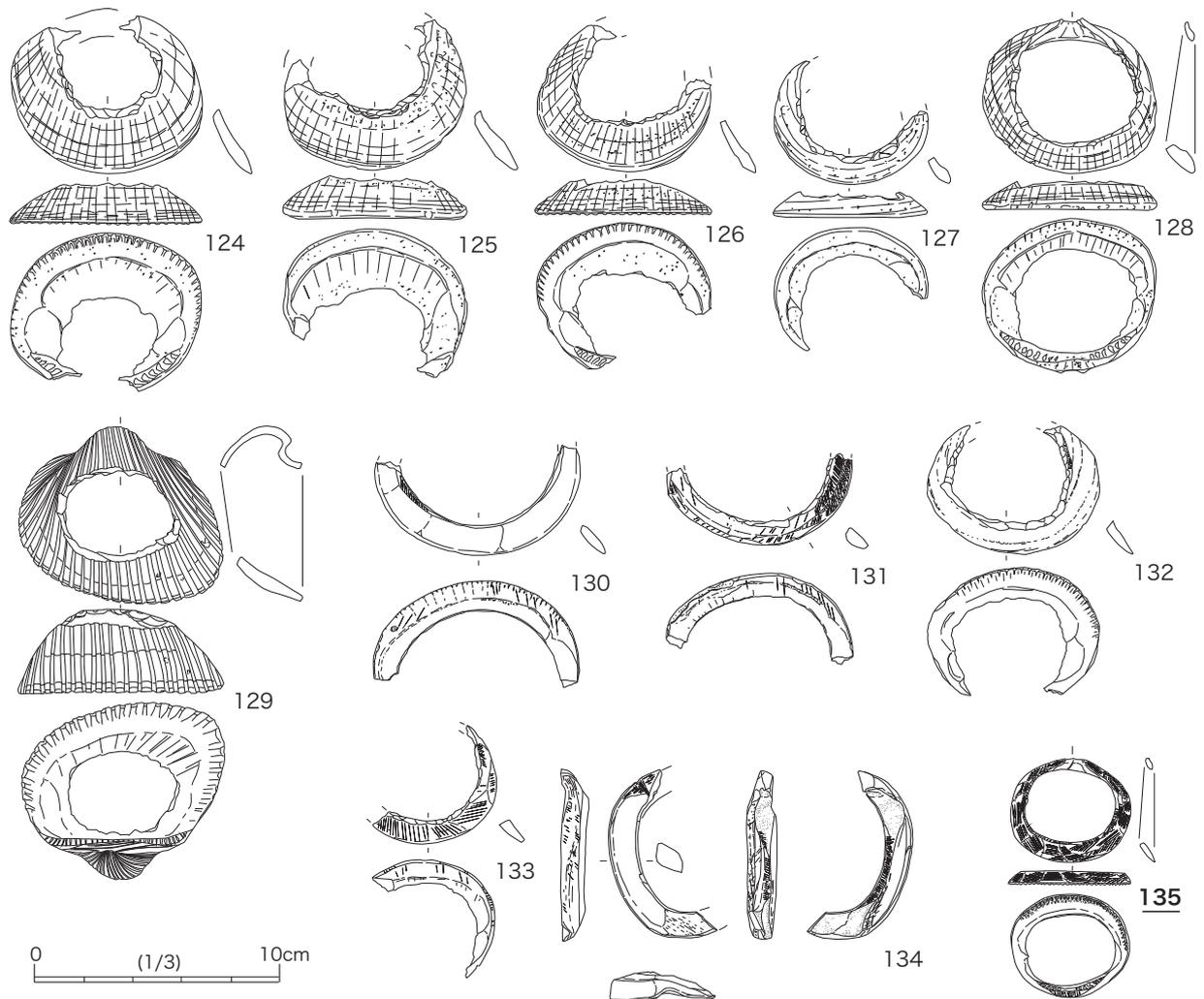
図10 九州地域の縄文時代貝輪8（鹿児島湾岸地域）【縄文時代後期】

種がフネガイ科である。佐賀貝塚・宮下貝塚では、桑原飛櫛貝塚よりも他貝種が多く認められるにも関わらず、点数としてはベンケイガイ製貝輪の比率の高い（表6）。

全体の法量を示すものに、外形の大きさと内周の法量がある。外形の大きさとして、全縦の値を代表させた場合、佐賀貝塚では5.4～7.3cmの範囲におさまる一方で、宮下貝塚・桑原飛櫛貝塚では全縦5cm未満と、より小型のものも存在していることが指摘できる。また、内周の法量は内縁周で代表させたが、その値では宮下貝塚・桑原飛櫛貝塚では、佐賀貝塚よりもより小型のものが存在している可能性が指摘できる（図13左）。

多くの形態の特徴が集約される腹縁部の断面形状を注目していくこととする。これについて、3遺跡のベンケイガイ製貝輪群について分類を行なったのが図12であり、表6中段にはそれ

による分類を表記した。この分類によると、全貝輪群で共通しているのは断面形状B-3であり、桑原飛櫛遺跡では加えて断面形状B-2も多く認められることから、断面形状B-2・B-3が、西北九州地域で広く共通して認められる貝輪形状であると指摘できる。このことは、貝輪製作の最終段階で、置砥石などによって上面全体を研磨調整したことが想定される。また断面形状C-1・C-2・C-3を呈するものの存在が、注目される。断面形状C群は西北九州域全体で共通する形状にさらに加工が加えられているもので、表中では佐賀貝塚でまとまっている状況を確認することができる。桑原飛櫛貝塚でも断面形状C-3を1点確認している（32）。またそれとは別に複数回敲打の資料で腹縁部に連続敲打を行なっている事例（35）も確認しており、ここから研磨工程を経ると断面形状C-3になる可能性がある。桑原飛櫛貝塚では、腹縁側断面形状C



124～129 夏井ヶ浜、130～134 小川島、135 白浜

【124～128・130～133・135：ベンケイガイ、129：フネガイ科、119・120：ウミギクガイ、134：ゴホウラ】

図 11 九州地域の縄文時代貝輪9（北部九州地域・五島列島）【縄文時代晩期末】

にも対応した製作+使用遺跡であるといえる。

佐賀貝塚における断面形状C群のまとめりにについては、対馬海峡を挟んだ大韓民国釜山市影島区東三洞貝塚出土資料との関係が想起される。東三洞貝塚では貝輪貝種の主体はベンケイガイであり、これまでに2000点ほど出土している。各段階の加工状況を示す資料が揃っており、東三洞貝塚も製作+消費遺跡である。一方、佐賀貝塚では初回敲打を示す貝輪資料が存在しない点、さらには舌状貝器と呼ばれる遺物が出土していない点から、貝素材が直接搬入された遺跡ではない。また佐賀貝塚では、複数回敲打以降の加工の各段階を示す資料が認められることから（表5）、他の遺跡からの搬入が想定される。

確かに、佐賀貝塚に最も近く、初回敲打を示す資料と舌状貝器の両者が出土している遺跡は東三洞貝塚であり、河仁秀が論じたように、東三洞貝塚から佐賀貝塚側に貝輪が搬入された可能性は高い（河仁秀2004：93～94頁）。40・41などは河仁秀がⅢ型式として分類し、東三洞型貝輪と提唱した（河仁秀2019）ものに相当するであろう。佐賀貝塚では大陸に棲息するキバノロ製垂飾（53）が出土するなど、韓半島南海岸との交流がより顕在的である。一方、九州島に関しては製作状況を示す桑原飛鶴貝塚の事例のほかにも、山鹿貝塚などで初回敲打の資料が報告されており（表5）、九州島の中で素材貝採取からの製作が行われたものと考えられる。

表3 九州地域縄文時代貝輪出土遺跡の地域・時期一覧（赤字は表4該当遺跡）

地域	A地域 玄界灘沿岸域 (西北九州域1)	B地域 対馬列島 (西北九州域2)	C地域 五島列島 (西北九州域3)	D地域 国東半島・別府湾沿岸域 (東九州域)	E地域 有明湾岸・八代海沿岸・天草 (中九州域)	F地域 甕海峡および日南海岸以南 (南九州域)
I期 早期末～前期初頭				成仏岩陰遺跡	東名遺跡・柳貝塚	
II期 前期～中期	楠橋貝塚・新延貝塚・沖ノ島 4号洞穴・下本山岩陰		江湖貝塚		轟貝塚・西岡貝塚・曾畑貝 塚・尾田貝塚・若園貝塚・阿 高貝塚・黒橋貝塚	江内貝塚
III期 後期初頭～後期中葉	黒崎貝塚・寿命貝塚・榎坂貝 塚・山鹿貝塚・新延貝塚・古 月貝塚・鐘ヶ崎貝塚・桑原飛 鶴貝塚・天神山貝塚・岐志元 村貝塚・新町遺跡	佐賀貝塚・志多留貝塚	鯛川貝塚・宮下貝塚	粉洞穴・植野貝塚・立石貝塚・ 森貝塚・川原田洞穴・小池原 貝塚	有喜貝塚・沖ノ原貝塚・一尾 貝塚・大野貝塚・浜ノ洲貝塚	出水貝塚・麦之浦貝塚・市来 貝塚・草野貝塚・武貝塚
IV期 後期後葉～晩期					御領貝塚・天岩戸岩陰遺跡	松添遺跡・柗原貝塚
V期 晩期末～	夏井ヶ浜貝塚・小川島貝塚		白浜貝塚			

表4 九州地域縄文時代貝輪着装・共伴人骨など事例一覧（片岡1983に加筆・修正）

遺跡名	時期	人骨番号(遺構)	年齢・性別 など	着 装 位 置 ・ 貝 種 ・ 個 数			備考
				左	右	伴って出土	
榎坂貝塚	後期中葉		老年・女性	ベンケイガイ 29	0		
山鹿貝塚	後期	1号	熟年・女性	フネガイ科 11	フネガイ科 1		福永・舟橋2019により 貝種が見直される
		2号	成年・女性	ベンケイガイ 14	ベンケイガイ 5		
		3号	成年・女性	ベンケイガイ 15	ベンケイガイ 9・フネガイ科 2		
		5号	成年・女性	ベンケイガイ 5以上	ベンケイガイ 6以上		
		9号	成年・女性	0	ベンケイガイ 3		
		16号	成年・女性	ベンケイガイ 13	ベンケイガイ 2		
		17号	熟年・女性	ベンケイガイ 20	0		
古月貝塚	後期	1号	・男性	ベンケイガイ 1	0		タマキガイ
桑原飛鶴貝塚	後期初頭(坂ノ下式期)	4号人骨(SR01)	熟年・女性	ベンケイガイ 11・フネガイ科 3	0		
新町貝塚	後期初頭	土壇墓 1	熟年・女性	フネガイ科主体(含ベンケイガイ) 14	フネガイ科 7		
小川島貝塚	晩期末～弥生前期	F区(3～7号) 人骨集中	—	—	—	ベンケイガイ 2?	貝輪出土範囲と埋葬人骨 出土範囲が重なる。
志多留貝塚	後期	1号	老年・男性	ベンケイガイ 1	フネガイ科 1		フネガイ科はサルボウ?
白浜貝塚	晩期末	2号	幼児(1才半)	—	—	ベンケイガイ 1	詳細不詳ながら人骨に伴 って出土
粉洞穴	後期初頭	7号	老年・女性	フネガイ科 1	0		フネガイ科はクマサルボ ウ
阿高貝塚	中期中葉	大正5年調査	老年・女性	フネガイ科 2	0		フネガイ科はアカガイ 樋口1952では左右デン 部に各一個の出土とある
轟貝塚	前期	清野3号	成年・女性	0	フネガイ科 1		フネガイ科はアカガイ
		清野5号	成年・女性	フネガイ科 1	フネガイ科 1		フネガイ科はアカガイ
		慶大1号 (1号土壇墓)	成年・女性	ベンケイガイ 1	フネガイ科 1		フネガイ科はアカガイ
尾田貝塚	中期(阿高式期)	第1号人骨	壮年・男性	—	—	フネガイ科 1	左手首位置付近に破片
沖ノ原貝塚	前期～中期 (轟式～阿高式期)	第1次調査第4号	—	ベンケイガイ? 3	ベンケイガイ? 2		左の1点は遊離して左胸 上で出土

※鹿児島県尾崎貝塚での貝輪着装人骨の出土が掲載されている(片岡1983)。しかしこれは、「備前 尾崎貝塚」事例(樋口1952)、すなわち岡山県船元貝塚出土事例の誤認のようである。

表5 ベンケイガイおよびフネガイ科貝輪 加工状況遺跡別一覧

遺跡名	地域別	所在地	時期別	大別時期	ベンケイガイ				フネガイ科				
					素材貝	初回敲打	複数回敲打	複数回敲打 +研磨	素材貝	初回敲打	複数回敲打	複数回敲打 +研磨	
黒崎貝塚	A	福岡県北九州市八幡西区	III期	後期中葉				○					
榎坂貝塚	A	福岡県遠賀郡岡垣町	III期	後期中葉			○	◎					
夏井ヶ浜貝塚	A	福岡県遠賀郡芦屋町	V期	晩期末	△	◎	△	◎	△				
山鹿貝塚	A	福岡県遠賀郡芦屋町	III期	後期中葉	○	○	○	◎					○
新延貝塚	A	福岡県遠賀郡鞍手町	III期	後期中葉				◎					○
桑原飛鶴貝塚	A	福岡県福岡市西区	III期	後期初頭	○		○	◎					○
新町遺跡	A	福岡県糸島市	III期	後期		△	△	○	△	△			◎
小川島貝塚	A	佐賀県唐津市	V期	晩期末～弥生前期			○	○					○
佐賀貝塚	B	長崎県対馬市	III期	後期中葉	△		△	◎					△
白浜貝塚	C	長崎県五島市向町	V期	晩期後半～弥生前期				○					○
宮下貝塚	C	長崎県五島市雷江町	III期	後期中葉	△	○		◎	△				◎
東名貝塚	E	佐賀県佐賀市	I期	早期未葉主体					○	○			○
阿高貝塚	E	熊本県熊本市南区	II期	中期～後期前葉				△	△	○			◎
黒橋貝塚	E	熊本県熊本市南区	II期	中期～後期				△	△	○			◎
一尾貝塚	E	熊本県天草市五和町	III期	後期中葉			△	◎	△	△			◎
浜ノ洲貝塚	E	熊本県宇城市	III期	後期中葉				◎	◎	○			◎
麦之浦貝塚	F	鹿児島県薩川内市	III期	中期～後期中葉	○	○	○	◎	◎	○	◎		◎
市来貝塚	F	鹿児島県市来	III期	後期中葉		○	△	◎	○	△			△
草野貝塚	F	鹿児島県鹿児島市	III期	後期中葉				◎		○			◎
柗原貝塚	F	鹿児島県垂水市	IV期	後期～晩期				◎		△			◎

※各遺跡での相対的な出土数傾向を示す。◎:主体的に多い、○:多い、△:ありもしくは少ない。

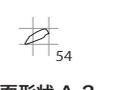
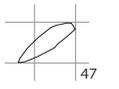
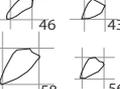
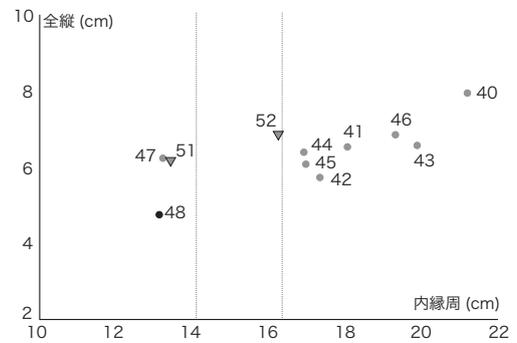
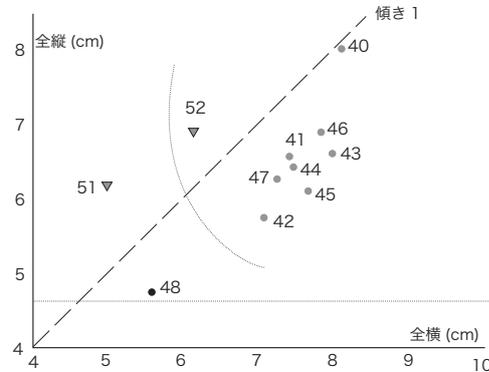
腹縁幅 b・全厚 腹縁幅 b/全厚値	腹縁幅 b > 全厚 0.2 前後	腹縁幅 b > 全厚 0.16 前後	腹縁幅 b ≤ 全厚 0.12 前後
上面非平坦化 (螺審側のみ平坦化 の資料も含む) 腹縁端三角形状	 断面形状 A-1 57	 断面形状 A-2 54	?
上面全体平坦化 腹縁端三角形状	 断面形状 B-1 47	 断面形状 B-2 44	 断面形状 B-3 46 43 58 56
上面全体平坦化 腹縁端 n 角形状 (n ≥ 4)	 断面形状 C-1 45 55	 断面形状 C-2 42	 断面形状 C-3 48 41 40

図 12 西北九州地域縄文時代後期貝輪腹縁側断面分類図

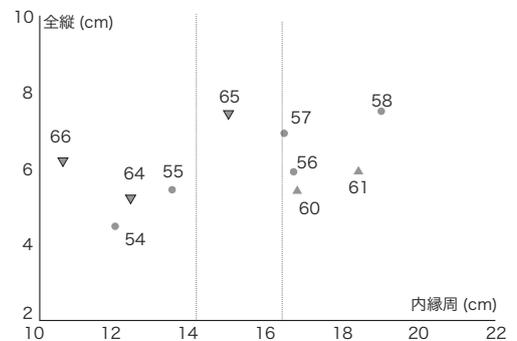
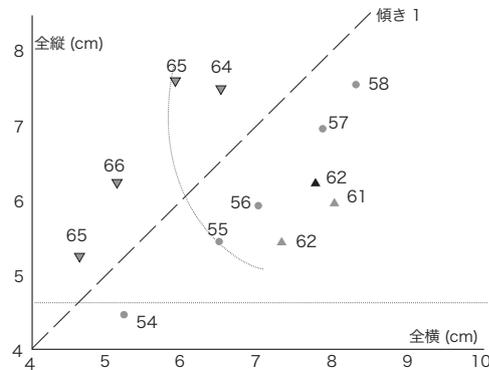
5-b. 放射状の加工 貝輪にはさらにさまざまな加工を加えられることがある。線刻や刻み入れがその代表的な装飾効果であろう。これはベンケイガイおよびフネガイ科を中心に認められる現象で、加飾により付加的な意味や価値を表現する効果があったと考えられる。

装飾加工 α：腹縁側を主体として刻み目などを入れる加工である。九州地域のみならず、東海・関東・東北地域など、縄文時代早期から晩期にかけてしばしば認められるものである。短い間隔で刻むように施される場合と、深く大きな抉

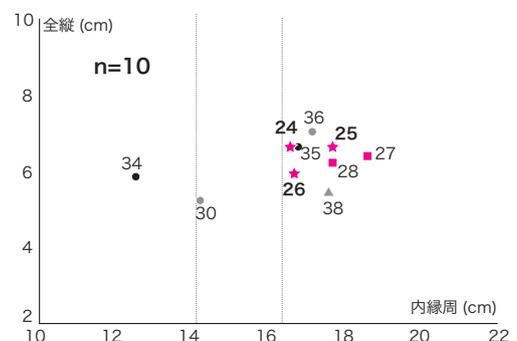
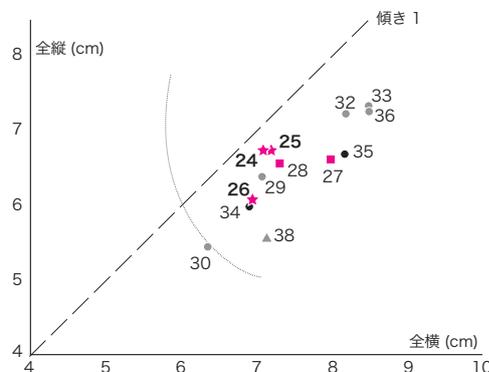
佐賀貝塚 n=11



宮下貝塚 n=12



桑原飛櫛貝塚 n=13



- 完形のベンケイガイ製 (法量実計測値)
- ベンケイガイ製 (法量推定)
- ★ 人骨着装 ベンケイガイ製 (法量推定)
- 刻み目のある ベンケイガイ製 (法量推定)
- ▲ フネガイ科製 (法量推定)
- ▼ ベンケイガイ・フネガイ科以外の貝種製 (法量推定)

図 13 佐賀貝塚・宮下貝塚・桑原飛櫛貝塚出土貝輪 法量計測値散布図 1

表 6 佐賀貝塚・宮下貝塚・桑原飛櫛貝塚における貝輪群の様相一覧

	佐賀貝塚	宮下貝塚	桑原飛櫛貝塚
貝種・点数・割合	ベンケイガイ 131 点 (87.92%) フネガイ科 5 点 (3.36%) チョウセンハマグリ 1 点 (0.67%) サルアワビ 4 点 (2.68%) ユキノカサ 2 点 (1.34%) マツバガイ 5 点 (3.36%) ウミウサギ 1 点 (0.67%)	ベンケイガイ 71 点 (60.68%) フネガイ科 42 点 (35.90%) イタボガキ科 1 点 (0.85%) ウミギクガイ 3 点 (2.56%)	ベンケイガイ 69 点 (75.82%) フネガイ科 22 点 (24.18%)
法量 (全縦推定値)	全縦 5.4 ~ 7.3cm	全縦 4.7 ~ 8.0cm 【2群に分かれるか】	全縦 4.5 ~ 7.6cm 【2群に分かれるか】
法量 (内縁周推定値)	13cm 付近と、16cm 以上の 2 群に分かれる。	10.6 ~ 13.5cm の群と、15 ~ 19cm の 2 群に分かれる。	12.5 ~ 14.2cm の群と 16.5 ~ 18.6cm の 2 群に分かれる。
ベンケイガイ製貝輪腹縁側断面形状 (図 12)	B-1、B-2、B-3、C-1、C-2、C-3	A-1、A-2、B-3、C-1	A-1、B-2、B-3、C-3
ベンケイガイ製貝輪加工の状況 【○：あり、△：稀少、×：未確認】	素材貝△、初回敲打×、複数敲打△、複数敲打+研磨○	素材貝○、初回敲打○、複数敲打×、複数敲打+研磨○	素材貝○、初回敲打×、複数敲打○、複数敲打+研磨○
ベンケイガイ製貝輪加飾の状況	腹縁側に作り出し形成：1 点	なし	側面に刻み状：1 点 表面上に放射線状の線刻：3 点
人骨着装状態の確認	なし	なし	4 号人骨 (ベンケイガイ 11 点・フネガイ科 3 点)

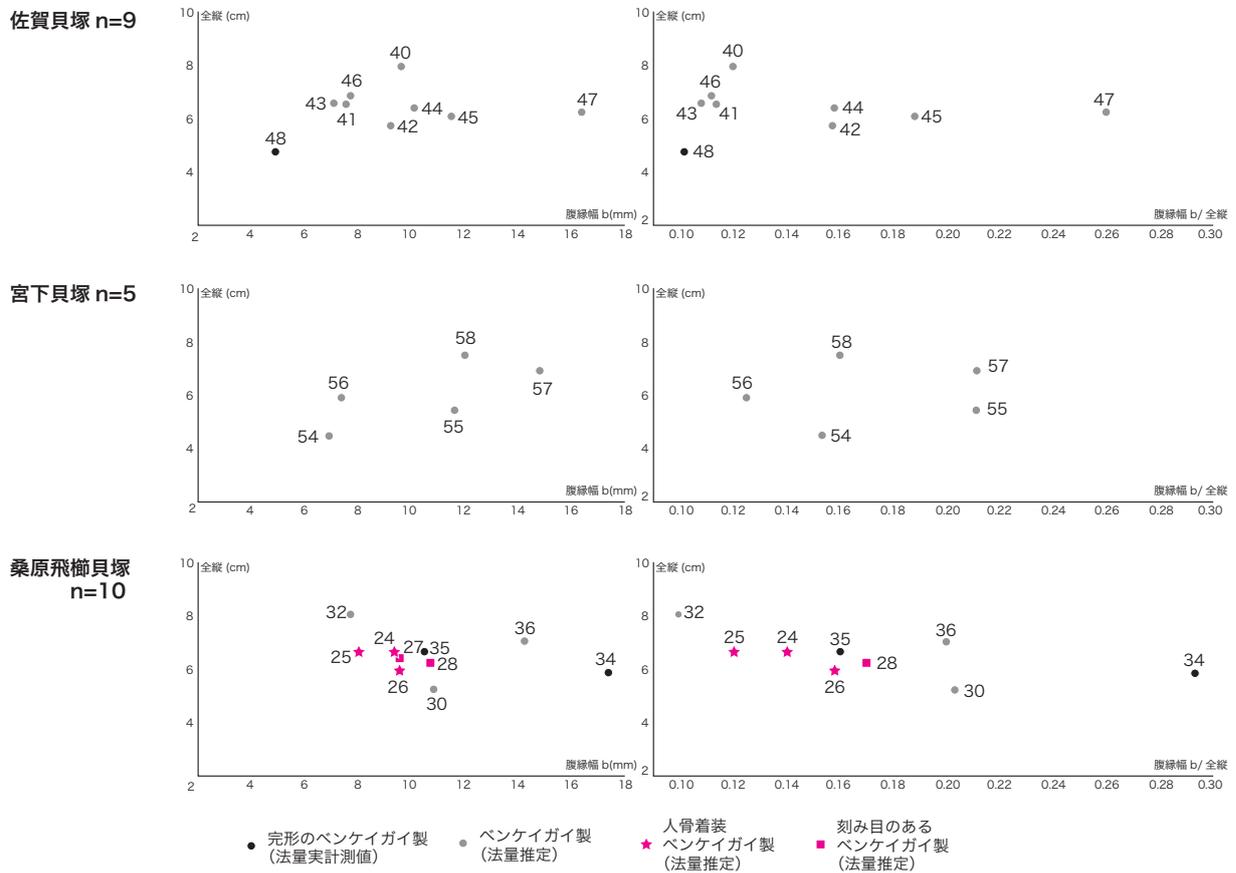


図 14 佐賀貝塚・宮下貝塚・桑原飛櫛貝塚出土貝輪 法量計測値散布図 2

り入りとなっている場合とが認められる。桑原飛櫛貝塚 (29)、佐賀貝塚 (46)、阿高貝塚 (75)、麦之浦貝塚 (98)、草野貝塚 (116・117)、のほか川原田洞穴や御領貝塚でも同様の加工事例が知られている。佐賀貝塚ではサルアワビ製で

も同様の加工が認められる (52)。細かい刻み目の場合、装飾加工 α は後述する装飾加工 β との親和性が強い場合もある。

装飾加工 β ：器表面を主体として線刻などが施されている加工である。場合によっては腹縁

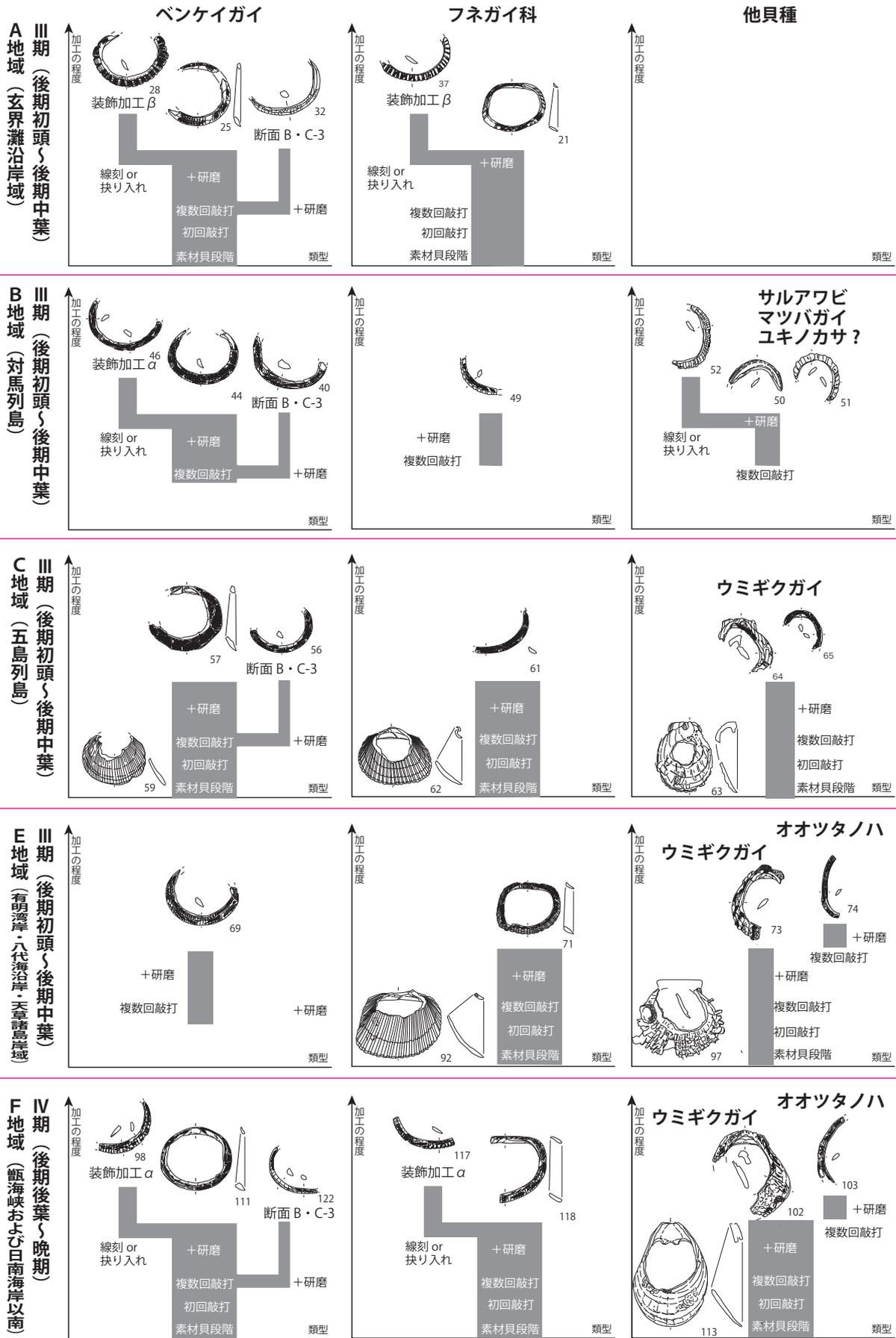


図 15 九州地域内 縄文時代貝輪群の様相

側への加工と連動していることがある。一方、装飾加工βは北部九州地域に特徴的に認められるようである。新延貝塚(6・10・11)、桑原飛榭貝塚(27・28・37)で確認できた。6・27・28はベンケイガイ製、10・11・37はフネガイ科製である。表面への連続した線刻あるいは抉り入れ研磨など丁寧に調整してから施されおり、10・28はベンケイガイの放射条線に対して、11・37はフネガイ科の放射肋を平滑にしてその痕跡を目安に抉り入れを施されている。ところが殻頂部側に近づくにつれて放射肋から外れ、むしろ貝素材の中心に対して放射線状に施されていることが分かる。この装飾の意味を特定することは難しいものの、この形状はカサガイ類の素材貝から製作された貝輪が連想されることから、カサガイ科製貝輪の役割を担わせた可能性も考えられる。このことは、A地域(玄界灘沿岸域)では、カサガイ類の資料が知られていないことと符合する。なお、装飾加工βの類例は、最東は島根県松江市小浜洞穴遺跡例(柳浦2012)で、最北は大韓民国釜山市影島区東三洞貝塚出土資料で認められる*。

6. 九州地域の貝輪の様相

6-a. 九州地域の貝輪群の構造的理解

以上の分析・検討から、加工段階と加飾および断面形状などについてまとめたのが、図15である。ここではⅢ期(後期初頭～後期中葉)およびⅣ期(後期後葉～晩期)に焦点を当て、A地域(玄界灘沿岸域)・B地域(対馬列島)・C地域(五島列島)・E地域(有明湾岸・八代海沿岸・天草諸島岸域)・F地域(甌海峡および日南海岸以南)の様相を示した。ベンケイガイ・フネガイ科、そしてその他貝種に分けて示しているが、これらを横断・包括した様相が、各小地域での貝輪資料群の構造として捉えられるものである。縦軸は加工の程度を示しており、トーンラインが横軸線より離れている場合は、加工の程度が進行した資料しかないことを、換言すれば製品に近い状態で搬入された可能性が高

いことを示す。

図15を一瞥して明らかなように、各小地域の様相はそれぞれ異なっている。それでもB地域(対馬列島)以外は、ベンケイガイ・フネガイ科のいずれかの貝種貝輪の製作+使用遺跡の様相を呈しており、貝輪風習自体、各地域内を基本として、素材獲得から製作・消費・廃棄(埋納)が行われ、一部貝種については他地域への流通、もしくは装着者の移動があったものと考えられる。

一方で、これら小地域全体を包括・共通する志向にも注目したい。ベンケイガイおよびフネガイ科を一般的な貝輪素材としつつ、ウミギクガイおよびカサガイ科をやや特別な貝種として位置づけているという傾向である。この傾向を端的に示しているが、A地域(玄界灘沿岸域)でみられる加飾加工βの貝輪資料の存在である。当時の縄文社会は広域で共通した志向がありつつ、小地域では各地の状況により差異が生じていたことがわかる。このことは当時の社会集団のある状態を示している可能性があり、例えばA～Fの小地域は女性の通婚圏などを示しているのかもしれない。

6-b. 多数装着事例の意味

貝輪の多数装着事例は、これまで見てきたように、A地域(玄界灘沿岸域)のⅢ期(後期初頭～後期中葉)に集中する。その中でも山鹿貝塚では6例も見つかっており、日本列島全体でも1遺跡内での集中としては現在のところ最多である。多数装着事例といえば、岡山県津雲貝塚清野34号人骨(熟年女性、左8・右7のフネガイ科)や愛知県吉胡貝塚文化財保護協会第19号人骨(熟年女性、左7・右4のフネガイ科)(川添2019)でも見つかっている。九州の事例は縄文時代後期初頭から中葉が中心であるが、津雲貝塚や吉胡貝塚で晩期初頭～前半と、時期は新しくなると考えられる。一方、関東地域では茨城県三反田蛸貝塚4号人骨(成人女性)で左腕にベンケイガイ13点の多数装着事例が知られている(鈴木2019)。時期が縄文時代中期末～後期初頭であることから、むしろ九

* 韓国新石器時代の貝輪を論じた、金恩瑩によると、このような線刻が入れられた貝輪は、東三洞貝塚で見つかっているのみとのことである(金恩瑩2003)。

州地域の多数着装事例と共時的現象であるといえる。関東地域では、この時期以降に多数着装状態を模した貝輪形土製品が盛行することからも、西北九州・関東地域と、地域を越えて共通した装身具志向が存在していた可能性がある。上記の現象の意義については、他装身具器種のほか、土器型式や文様意匠の展開を含めてさらに検討する必要がある、今後の課題としたい。

謝辞 本稿を草するに際して、以下の方々および機関には、格別のご配慮およびご教示を賜った。ここに謝意を表する次第である。

赤井文人、阿比留伴次、阿部芳郎、井澤洋一、大塚達朗、小田富士雄、金 建洙、古後憲浩、新町 正、田中 暁、中尾篤志、鍋内千亜喜、西田 巖、羽生文彦、深澤太郎、藤井大佑、福

永将大、前 幸男、水上公誠、宮元香織、宮本一夫、山田克樹、山崎純男、分部哲秋

本稿は、JSPS 科研費【課題番号 20K01080】基盤研究 (C)「骨角製装身具類の包括的検討からみた縄文から弥生への時代変遷の解明」(研究代表者 川添和暁)の成果の一部である。

資料の所在など

1～5：北九州市立自然史・歴史博物館、6～11：鞍手町歴史民俗博物館、12～23・124～129：芦屋歴史の里、24～39：福岡市教育委員会、40～53：対馬市教育委員会(峰町歴史民俗資料館)、54～68：長崎大学医学部、75～80・83～92：熊本県教育委員会(熊本県文化財展示室)、81・82：大阪府立近つ飛鳥博物館、93～97：國學院大學博物館、98～110：薩摩川内市教育委員会、111～113：いちぎ串木野市歴史民俗資料室 114～120：鹿児島市立ふるさと考古歴史館、121～123：垂水市教育委員会、130～134：唐津市教育委員会、135：五島市教育委員会

参考文献

- 阿部芳郎 2019「身体装飾の発達と後晩期社会の複雑化」『身を飾る縄文人 副葬品からみた縄文社会』303～320頁 雄山閣
阿部芳郎・金田奈々 2013「子供の貝輪・大人の貝輪―貝輪内周長の計測と着脱実験の結果から―」『考古学集刊』9. 43～56頁 明治大学文学部考古学研究室
小田富士雄ほか 1994『九州の貝塚―貝塚が語る縄文人の生活―』北九州立考古博物館 第12回特別展図録
乙益重隆・前川威洋 1969「縄文後期文化・九州」『新版考古学講座3(先史文化)』雄山閣
片岡由美 1983「貝輪」『縄文文化の研究』9. 231～241頁 雄山閣
川添和暁 2011『先史社会考古学―骨角器・石器と遺跡形成からみた縄文時代晩期―』六一書房
川添和暁 2013「福岡市西区桑原飛鳥貝塚出土貝輪について」『貝塚』68.21～27頁 物質文化研究会
川添和暁 2019「東海地方の貝塚に残された副葬品」『身を飾る縄文人 副葬品からみた縄文社会』71～88頁 雄山閣
木村幾多郎編 1980『新延貝塚』鞍手町埋蔵文化財調査会
九州縄文研究会 2005『九州の縄文時代装身具』九州縄文研究会 沖縄大会実行委員会。
新東晃一 1991「南九州の縄文後期の貝輪―特に川上貝塚出土の貝輪製作工程について―」『南九州縄文通信』5. 50～55頁
鈴木素行 2019「資料紹介 三反田のベンケイガイ―貝輪着装人骨と貝輪土製模造品―」『ひたちなか埋蔵文化財』50. 14～18頁 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
河 仁秀 2019「東三洞貝塚―貝輪の生産と流通―」『身を飾る縄文人 副葬品からみた縄文社会』181～188頁 雄山閣
樋口清之 1952「腕輪考」『上代文化』23. 9～19頁 国学院大学考古学会
藤田 等・東中川忠美ほか 1981『大友遺跡』鳴子町文化財調査報告書第1集
松永幸男 1995「福岡県遠賀郡芦屋町山鹿貝塚採集貝製腕輪の紹介」『研究紀要』2. 31～46頁 北九州市立考古博物館
柳浦俊一 2012「松江市美保関町小浜洞穴遺跡の出土遺物―島根大学考古学研究室所蔵遺物を中心に―」『古代文化研究』20. 45～76頁 島根県文化財センター

韓国側文献

- 中山清隆 1992「韓国地域出土先史貝輪小考」『考古歴史学志』8. 461～470頁 東亜大学校博物館
金 東鎬・朴 九乘 1989『山登貝塚』釜山水産大学博物館
金 恩瑩 2003『新石器時代 貝釧 研究』釜山大学大学院 文学硕士学位論文
河 仁秀 2004「東三洞貝塚文化에 대한 予察」『韓国新石器研究』7. 77～103頁 韓国新石器研究会
河 仁秀 2006「新石器時代 貝製品 의 種類와 利用」『石軒 鄭澄元教授 定年退任記念論叢刊行委員会
河 仁秀 2007『東三洞貝塚 浄化地域 発掘調査報告書』釜山博物館